

緊急時評

亀裂深まる

—天安門事件と鄧小平失脚—



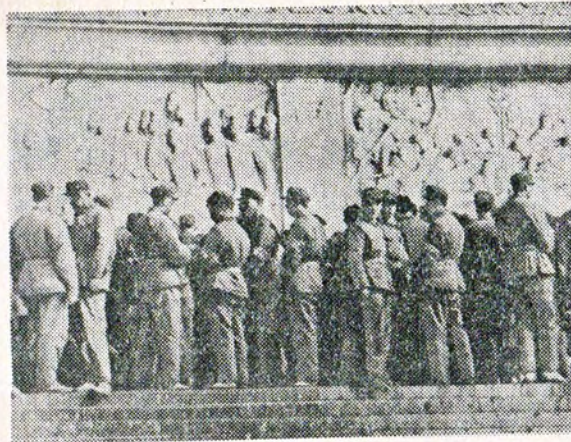
中嶋嶺雄

(東京外語大助教授)

毛沢東体制

1 天安門前事件の衝撃

中華人民共和国の成立以来、すでに四半世紀有余、この間、中国内部には一貫して、深刻な路線闘争が継続してきたといえ、そのような路線闘争は、中国共産党上層部における毛沢東政治への批判と抵抗であり、広範な中国民衆のなから、つまり社会の底辺から起こった毛沢東政治への批判ではあり得なかった。去る四月五日に発生した天安門事件は、この点でこれまでの中国の政治的事件とは根本的に性質を異にするものである。



故周首相の追悼集會に集まった解放軍の兵士

われ悲しむに 鬼どもは叫び
われ泣くに けだものは笑う
……
中国は過ぎし中国にあらず
人民も 愚かさきわまるものにあらず
始皇帝の封建社会は 再びかえらず
われらは マルクス・レーニン主義を
信奉す
マルクス・レーニン主義を去勢する秀
才どもよ
引きさがれ！
(四月七日の北京放送が引用した天安門広場事件での「反革命分子」の書より)

翌々七日、この事件について初めて報道した新華社電は、「ひとにぎりの階級敵は四月上旬、天安門前広場で清明節に周総理を追悼するという看板をかかげ、事前に謀議し、計画的、組織的に反革命政治事件を起こした。……彼らは、常軌を逸してホコ先を偉大な指導者毛主席に向け、毛主席を先頭とする党中央を分裂させ、鄧小平批判・右からの巻き返しへの反撃の大方向をねじ曲げようとたくらんで、反革命活動をおこなった」(『人民日報』労働兵通信員と同紙記者の共同執筆)と事件の輪郭を概括した。

右の公式な概括は、この事件を詳報した外国人記者の報道に照らしても、まさしくそのとおりであろう。だが、それゆえにこそ、今回の事件はきわめて深刻な政治的・社会的意味を有するのである。

およそ、中国のような国家体制のもとで、直接的にせよ間接的にせよ、毛沢東体制への批判を含意した政治行動に数万人の民衆が加わるといふようなことは、一般にはあり得ることではない。この日の大衆暴動を鎮静させようと懸命に努力した呉徳・北京市革命委员会主任(党中央政治局員)は、「本日、天安門前広場で悪い者が反革命の破壊、かく乱をおこない、反革命破壊活動

をおこなっている。革命の大衆は即刻、広場を離れるべきであって、彼らのたぶらかしに乗ってはならない」(北京放送四月七日)とくりかえし呼びかけたという。そして、四月七日の中共中央の決議は、天安門前事件の結果、「鄧小平問題の性格は敵対的矛盾の一つに変わった」と断定して鄧小平失脚を決め、同時に華国鋒首相代行の党第一副主席および首相職任を決めたのだが、しかし、鄧小平氏は、この間の「走資派」批判によって「悪玉」として激しく糾弾されてきていたのであるから、もしも、党中央のいうように鄧小平氏が天安門前事件の「仕掛人」であったのなら、そのような「悪玉」が組織した政治的行動に数十万の北京市民が集まり、そのうち数万人が明白な意志をもって「反革命的活動」に立ち上がったことになるのであり、それだけに今回の事件のもつ意味は深刻である。

しかも、天安門前事件と同種の事件が河南省の鄭州市でも同じ清明節に発生していたことが明らかになり、そこでは死者まで出たことが報じられた(北京放送四月十日)。それ以外にも地方各都市で同様の事態が潜在していたと見ることもできるのである。こうして、今回の事件は、激動の相次い

2 毛沢東批判への大衆の知恵

それにしても今回の事件は、数万人の大衆が参加した一種の騒乱であっただけに、中国の内政、とくに最近の路線闘争に含まれるきわめて複雑な諸断面が、はからずも多面的に露呈することとなった。

まず第一に指摘すべきことは、今回の事件によって、最近の中国にはやはり周恩来批判が一貫して存在していたことが明らかになったことである。この点について私

は、すでに「批林批孔」運動や「水滸伝」批判に一貫して周恩来批判が含意されていたことを指摘してきたが、今回の「走資派」批判も、結局は、周恩来路線への批判であり、このことは、「走資派」の罪状となった「国民経済の発展」「工学、農学、国防、科学技術の四つの近代化」そのものが、昨年一月の第四期全国人民代表大会での周恩来演説への批判に等しいものであることによっても、ほぼ明らかであった。しかし、今回は、まさに事件の渦中において、「走資派」批判の急先鋒だった清華大学の学生が、「なぜ周首相に反対するのか」と群衆から暴行を受けた時、周恩来批判をおこったといわれる上海『文匯報』への反批判があったことなど、一般的に「走資派」批判が周恩来批判を含意することへの大衆の不满と反批判が激昂したことによって、問題の存在が動かし得ない事実として露呈したのであった。

そこで第二の重要な問題は、中国民衆のあいだに潜在する周恩来追慕の情が、いまや周恩来礼讃となつてあらわれたことのもつ意味である。例えば、文革派は、周恩來の死を悼むあまり、周恩來の政治的遺産が大衆のあいだに浸透することそれ自体を快

く思わなかったものと思われ、本誌前号で私が指摘したように、周恩来追悼式（二月十五日）直後の一月十九日にも、すでに天安門前広場の革命英雄記念碑に捧げられた、周恩来への献花を撤去した事件があり、一方、亡き周恩来を追悼する論文や記事は、もなく『人民日報』などの公式雑誌からも消え去ってしまった（正確には二月九日付『人民日報』を最後に、周恩來の名は公式報道から消え去っている）。世紀の宰相の死にたいするこの処置は、あまりにも冷淡ではなかっただろうか。そして、周恩來死後初めて刊行された『紅旗』二号や文革派の『機関誌』『学習と批判』第二号などは、周恩來の死にまったく言及していないばかりか、かえって、明らかに周恩来批判を意図した「折衷主義」批判の論文を掲載したのである。このような背景こそ、「走資派」批判が文革派の拠点以外では拡大しなかった理由であると同時に、清明節を借りて、周恩來擁護と文革派への大衆の批判が激発した理由であったといえよう。それにしても、唯一無二の偉大な絶対的指導者であるべき毛沢東主席の存在を尻目に、あのようにな周恩来礼讃が大衆的にわき起こったことこそ、きわめて大きな意味をもつてである

3 強行された鄧解任と華国鋒昇任

天安門前事件に衝撃を受けた党中央は、四月七日、急速「毛主席の提案に基づき」、鄧小平のすべての公職解任と華国鋒首相代行の首相昇任を決めた。もとより、この決定は、いかにも泥縄式のものであって、党副主席である鄧小平の解任を党中央委員会にはかったものでもなく、党中央委の発議によつて全国人民代表大会で首相を決定するという現行憲法上の措置さえ経ていないものである。形式上は手続きのない問題が残る決定である。政治局会議の満場一致の決定というが、地方にいる政治局員も含むと全員で二十二名の政治局員（政治局員候補も含み現在は十九名が現員）が出席した会議であったとはとうてい思われない。

しかも、鄧小平問題は「敵対的矛盾」であり、天安門前事件は「反革命事件」だといひながら鄧小平の党籍が残されたのは、「病を治して人を救う」との毛沢東主席の方針などではさらさらなく、鄧小平の党籍剝奪までは一挙に実現できなかったため

はないかと思われる。そもそも一九七三年四月の鄧小平復活は、悔い改めた鄧小平氏が右の毛沢東主席の方針によつて復活したのではなく、まさに当時の「潮流」と「反潮流」の路線闘争の一環としての政治的復活であり、このことは今回の一連の事態でさらに、明白になったのである。しかも、文革派は、この決定を契機に当面の対象を鄧小平一人に限定し、鄧小平批判の底にあった周恩来批判を当面引つ込めざるを得なくなるであろう。なぜなら、大衆の反撃が当然予想されるからである。一方、「走資派」は、はたして鄧小平一人だけだったのであるか。「走資派」批判が周恩来路線への批判と同列であったように、鄧小平は決して孤立した存在ではなかったのである。まさに『人民日報』社説がこれまでにもしばしば強調していたように、「彼らの活動には、理論があり、綱領があり、組織があった」のである。もしも路線闘争を徹底させるのなら、これらの「走資派」を根こそぎ打倒せねばならないのだが、鄧小平解任と時を同じくして、李先念・副首相や譚震林・全人代常務委副委員長らいわゆる周恩來系統の実務派旧幹部が久々に姿をあらわしている。こうした状況は、急激に

う。この事実も、明らかに毛沢東絶対化への批判と抵抗を含意するものであるからである。

そして第三には、このような毛沢東体制において、いわば毛家王朝的な側近政治、家父長政治を演出してきた文革派の指導者、とくに江青夫人への鋭い批判が発露したことである。「真のマルクスレーニン主義を骨抜きにしようとして、ハサミを振り回すやからをわれわれは粉砕する」とのスローガンや「周総理が江の水に流されるのは許し得ない」という文書などがあらわれたのははじめ、毛沢東の前々夫人で一九三〇年に没した烈士・楊開慧女史の名がこの場面に出されたことなどは、つねに公的な政治に徹した周恩來の立場への共感と同調であると同時に、政治権力を「私物化」している張本人だと大衆が感じ江青女史が厳しく指弾されたことを意味している。

以上のように見てきたとき、天安門前事件は、毛沢東政治の批判へと流れる中国民衆の存在を明白に示したばかりか、中国民衆の健全な政治感覚と英知がそこにほのめえていたともいえない。もとより、一たびこのような叛旗がひるがえされた以上、彼らは徹底的に断罪されねばならない。進展した事態の背後に、すでに一種の暫定的な妥協があったことを示唆しており、「走資派」にとつて、鄧小平氏がかかるうじて党籍を保持し得たことは、やがて毛沢東以後の時代への一つの捨て石であるのかもしれない。

いずれにせよ、華国鋒首相は、一種の「危機管理内閣」をあずかっているにすぎず、彼が将来的にも安定した地位を保持するためにはやがて近い将来、文革急進派上海グループと袂を分かつことになるかもしれない。なぜなら、今回のパターンのままであるならば、毛沢東主席と同郷の湖南省出身で公安組織を握る華国鋒は、かつてスターリン時代の末期に、秘密警察を握り、スターリンと同郷だったベリヤが台頭した状況と、あまりにも類似しているからである。

いずれにせよ、今回の一連の事態は、毛沢東以後の中国へのあまりにも大きな不安を残してしまったといわねばならない。果たして今回の天安門前事件の真の演出者は誰だったのか。この巨大な謎に明白な解答が与えられるまでには、まだまだ時間がかかりそうである。